

水不足懸念！早期茎数確保に向け健苗育苗を！

【管理のポイント】

- ① 土づくり資材等の積極的な施用と健苗育成で、早期茎数確保を図りましょう。
- ② 丁寧な耕うん・代かきで保水性を確保しましょう。

1 育苗後半の管理

育苗様式	管理ポイント（温度・水管理等）
稚苗・ハウス	① 温度管理：日中 15～20℃、夜間 10～15℃（8℃以下の低温にしない） ② 硬化期前半 ・午前中早めにハウスの換気を始め、夕方には閉める。 ・かん水は朝に充分行い、原則夕方には行わない。（床土が乾いた場合のみかん水する） ③ 硬化期後半 ・田植え5～7日前からは夜間もハウスを開放する。（異常低温時は除く）
露地・プール	① 無加温・露地プール育苗では低温による出芽遅延や苗揃い不良の懸念があるため、除覆前は保温に努める。 また、降雨後は酸欠とならないよう、被覆資材の上やプール内にたまった余分な水を排除する。 ② 除覆、湛水後は苗が伸長しやすいので水温の上昇に注意し、必要に応じて水の更新を行う。 ③ 霜注意報等、異常低温が予想される時は速やかに床土より上まで湛水する。 ④ 育苗箱を軽くするため移植2日程度前から落水する。

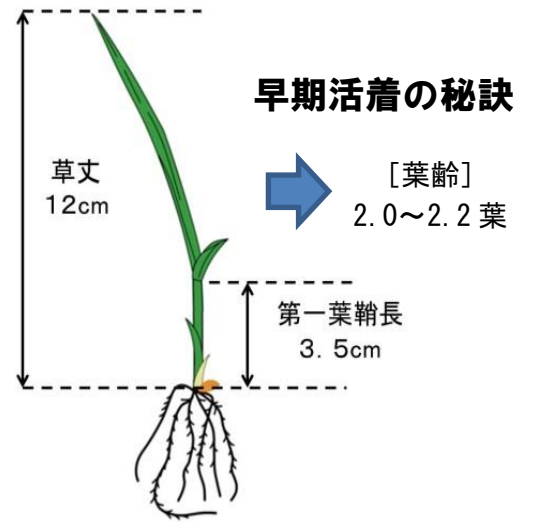


図 理想的な稚苗（規格苗）

※用水が不足して田植えができず、苗が老化する懸念がある場合は被覆をせず、できるだけ高温にならないよう管理しましょう。

2 移植前追肥（べんとう肥）の施用

- (1) 施用時期は移植4～5日前(1.8葉期)が基本です。苗の老化防止と移植後の活着を早める効果があります。
- (2) 窒素成分で1箱当たり1～2gとなるよう、肥料を箱の上から散布します。散布後は十分散水して肥料ヤケを防ぎましょう。
- (3) プール育苗の場合は落水後に灌注するか、箱の上まで水を張って施用しましょう。後者の場合は施用後2日間程度落水しないようにしましょう。
- (4) 軟弱・徒長苗の場合は、障害発生の可能性があるため追肥を控えましょう。

3 施肥 ～気象変動に強い稲づくりのため、土づくり肥料を活用しましょう～

基肥は、良質茎の早期確保のために重要です。しかし、施用量が多すぎると過剰生育となるため、前年に生育過剰となったほ場や倒伏したほ場では減肥しましょう。それぞれのほ場の地力に合わせて施肥量を設計することが重要です。

リン酸、加里の少ない低コスト肥料を使用する場合は、事前に土壌診断を行い、リン酸・加里が不足していないことを確認しましょう。高温に強い稲づくりのために、土づくり肥料を活用し、稲体の強化に努めましょう。

【コシヒカリ基肥量のめやす (kg/10a)】 (分施)

成分	窒素	リン酸	加里
粘土質	2～3 (2～3)	7 (10)	6 (6)
砂質	3～4	8	8
黒ボク	(4)	(10)	(8)

【こしいぶきの基肥量のめやす (kg/10a)】 (分施) ※カッコ内は中山間地の値

成分	窒素	リン酸	加里
粘土質	3 (3)	7 (7)	6 (6)
砂質	4	8	6
黒ボク	(4)	(7)	(6)

4 耕うん・代かきの留意点

- (1) 耕うんの留意点
 - ・畦塗りは丁寧に行い、畦畔の亀裂やねずみ穴等からの漏水防止に努めましょう。
 - ・根域を拡大させ、高温や水不足の影響を軽減するために、耕深15cmを確保しましょう。
- (2) 代かきの留意点
 - ・浅水代かきにより、用水の使用量の削減に努めましょう。
 - ・保水性の確保および除草剤の効果を安定させるために、代かきは丁寧に行いましょう。



(代かき前の状態)



(代かき作業中)

浅水代かきの作業のポイント

- ・代かき時の水のめやすは、土が8割、水が2割見える程度とします。(写真参照)
- ・代かきまではゆっくり水をため、しっかり土を湿らせておくと作業がしやすくなります。
- ・代かき時に水が足りないようなら、少しずつ入水しながら代かきを行いましょう。

写真：鳥取県ホームページより